

未来へ夢を育む学校



# 学校だより

(題字 学校長)

10月号 学校長 望月 重晴



## 時が経つのを忘れたいが、限られた時間の中で

副校長 岡崎 大輔

夏休みが終わり、早いもので1か月が過ぎました。残暑の厳しさを感じていたら、朝晩は肌寒く、日差しを避ければ過ごしやすく、吹く風はもう秋めいています。最近、急に暑くなったり、寒くなったり、過ごしやすい春と秋、季節の変わり目が短くなっている気がします。6月を思い出しても猛暑日の連続でいきなり真夏のようになり、今年は梅雨明けの速報(関東甲信地方)が\*6/27と異例の早さでした。(後日\*7/23へ変更)

「今週は長かった。」あるいは、「あっという間に終わってしまった。」など、日常会話の中でも何度も口にしたことのあるこの言葉。子どもの頃は長かった夏休みも、大人になった今では何倍も早く過ぎ去ってしまったように感じます。また、楽しい時間はあっという間に過ぎるのに、退屈だったり、苦しかったりする時間はとてつもなく長く感じる場合があります。同じ長さの時間なのに、その時々や人によって、どうして長く感じたり短く感じたりするのでしょうか。

楽しい時間はあっという間に過ぎるのに、退屈な時間はなかなか過ぎない。この感覚を引き起こしている主な要因は時間経過に対して向けられる「注意」であると考えられています。時間の経過に注意が向けられる頻度が高いほど時間がより長く感じられるのです。逆に、時間の経過に注意が向けられる頻度が低い場合や、時間の経過以外の事柄に注意が向けられる場合には、時間は短く感じられます。(一川 誠〈日本心理学会 2010〉<https://psych.or.jp>)

人によって、世代によって、状況によっても時間の感覚は異なるのかもしれませんが。こんな理屈もあります。50歳の1年は人生における1/50(2%)としたとき5歳の1年は1/5(20%)、理屈上、子どもにとっての1年は、大人より10倍濃密な1年といえます。

自分に与えられている時間を有効に使いたいと誰しも思うことであり、そう思っただけでも気付いた時には無駄に時間を過ごしてしまうことがあります。最後に言えることは、子どもたちには楽しかったり、苦しかったり、短かったり、長かったりする、そんな時間の感覚を感じたり、時間を忘れるくらい何かに夢中になったりして、濃密で豊かな時間を過ごしてほしいと願います。

10月7日(金)をもって令和4年度の前期が終了となります。終業式の日「あゆみ」を持ち帰りますが、「あっという間の前期だった。」と言える子どもがどれくらいいるのでしょうか。子どもたちには、まだまだたくさん我慢をさせている状況に変わりはありませんが、子どもたちなりに現状を理解し、今できることの中で学校生活を過ごしています。学校では感染症対策を継続しながら、子どもたちの安全を最優先に教育活動を進めてまいります。今後とも皆様のより一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。